



vol.4 ルネサンス

横浜市内の某管理釣り場に出掛けてきましたが、現在のヘラブナ釣りに対して感じていたことが、ほぼ確信に変わった一日でしたね。

池は盛況でした。満席に近く、この釣りの未来も捨てたもんじゃないか？とも感じたワケですが、時間の経過とともに、それは絶望にも近い気持ちに変わります。

釣り人の数だけ魚も分散されて、明らかに前回訪れた時とは違いました。半月前の釣果である時間あたり50枚を叩くのは、僕には到底ムリだったと思います。

僕の午前中は、初対面の方との話に夢中で、2時間も釣りをしていませんが、掴んだ雰囲気はこんな感じでした。

びざーる作。
30枚/時まで実証^^



[いいね!](#) [コメントする](#) [お知らせを停止](#) [宣伝する](#) [シェア](#)

「余分な動きが多く、中でもしっかりした強いアタリを狙っているつもりが、ことごとくスレになる」

エサはダンゴです。コレって、良く遭遇するパターンですよ。サワリすら無い（または、出せない）、という状況と同じくらい、よく見聞きするパターンです。事務所から池を一望出来るため、昼食を摂りながら他の方々の釣りを眺めていましたが、まさにそんな感じでした。ショックだったのは、その状況を打開出来る釣り人がひとりも居なかったことです。やりようがない諦めムードというか。漫然とエサを打ち、アワせているのかエサ切りなのか、とにかく竿を上げる度に引っ搔くのも仕方ないという、なんとも言えない沈滞感。



ヘラブナ釣りにおいては、カラツンもイトズレも消すことは出来ません。スレもゼロには出来ません。それでも、やりようによっては、食う確率が高まる可能性は有ります。ですが、結果は出ないとしても、確率を高める方法論に、果敢にチャレンジしている雰囲気は、僕から見える釣り人の中からは、誰一人として感じ取れませんでした。残念ながら、トーナメントふうの方からも。

ノンビリ楽しんでいるように見える方から感じられないのは当然のように思いますが、釣る気が無いならまだしも、やはり釣りたい気持ちがあるからこそ、竿を振り続けている筈です。延々とスレを搔きながら、エサ打ちをやめないのは、次こそ食わせたい、もっと釣りたい、という気持ちが有る証拠でしょう。

「上手くなる気は更々無い。自分の知ってる範囲で釣れなきゃお手上げ」
そう腹を括る釣り人なら、エサ打ちをやめませんか？

「余分な動き」

とは、口を使わないヘラが邪魔をしている状況です。

「しっかりした強いアタリがスレになる」

ゲキカラってのは確かにありますが、本当の食いアタリを知らないと、こうなりますね。しっかり、強い、という意味を、まだ理解していないのです。おそらく、「大きい」と呼ぶべき動きも、混同している状況でしょう。

食いアタリの選定眼は、経験で培われるものなので、いきなり選るのは難しいかもしれません。流行に流され、覚えたてからいろんな種類のトップに手を出している釣り人は、選定眼の会得は尚更遅れます。慣れたウキも大事です。でもそれはとりあえず置き、肝心の水中で起きている現象を想像してみます。いろいろ考えられますが、たとえば、

「エサ投入後、まず、食わないヘラが条件反射的に寄り、アオリでエサを開かせてしまっている。やや遅れて来る肝心の食うヘラのアタックに、エサが耐えられない状況である。」

と考えてみます。所謂、

「エサが持っていない」

状況ですから、スレも多くなって当然です。「エサが持っていない」とはどういう状況なのか、ナジミ幅は出ているよ？というレベルの方には、いつかあらためてまた書かせていただきますので、今回は諦めて読み進めてください。

「意味が分からないまま読み続ける専門誌も、一年経ってまた読めば、今度は理解出来るよ



うになっている。」

僕の経験です。人間の脳は、順序立てて学ばなくとも、パズルを解く力を持っています。もちろん、順序立てて学んだ方が、合理的で早いのは言うまでもありませんが。

水中の状況がイメージ出来たのですから、後は対策を練るだけです。

「上でエサをあまりサワらせずに、タナに届ける」

ことさえ出来れば、問題は全て解決出来そうに思いますので、

「上でサワらせない方法」にはどんなものがあるのか、考えてみますと、

「エサのバラケ性を抑える」

「ハリスを詰める」

「大きなウキに換える」

「エサ打ちリズムを遅らせる」

「タナ規定の無い釣り場なら、タナを浅くする」

など。

それぞれの効果や意味、デメリット全てを述べよ、とは言いませんが、先ほどと同じく、モヤモヤした気持ちがある方は、ここでも諦めて読み進めてください。

結果から言えば、僕は4番目の「リズムを遅らせる」というネガな方法論以外、全て試しました。試した、というより、総合的に変更を加えたということになります。ただこれは、経験からそうしただけで、自信の無い方が一気に複数箇所イジるのは危険です。おそらく、どれか一つを選択しただけだとしても、ブレずに貫けば、結果は出たと思います。

「静かに入れて、強いアタリを狙う」

ことで、ヘラブナの寄りを保てるのであれば、実はとても簡単な世界です。キチンとハリスが張った状態からは、アタリの強弱も学べます。ヘラブナに弄ばれることなく、「持ち過ぎのカラツン」を目に焼き付けるべきなのです。「それが出来ないんだよ！」そう聞こえてきそうですが、「帰り荷の役立たず」や「ウソナジミ」はその次の世界です。

昔から言われる「ナジマせて釣れ」は、やはり上達への近道であり、王道です。ここまで



達した後にはじめて、ボケるリスクを承知の上で、あえて少しはしゃがせてみる、落ち込みを狙う、戻しを取る、などと、他人より一枚多く釣るための冒険が始まります。

さておき、

「ヘラブナを、自分のコントロール下に置く」

「地合構築＝完全支配」

という感覚を味わうことが、まずは大事です。この感覚を味わってはじめて、この釣りの奥深さを知る第一歩に、やっとなり得るワケです。そして、この感覚習得には、他人の釣果との比較は不要です。ナジミ幅やアタリの再現性、連続性、釣れるリズムを時計を見ながら確認し、「自分なりのペース」を認識し、反復の中で確立させます。それが練習です。

言われた通りの釣り方で、ノンビリと釣りをするという「ポーズ」からは、本物の「マイペース」は生まれません。隣の誰かが、時間あたり20枚は釣る状況の中で、たとえば、今日は竹竿で時間あたり5枚くらいで楽しみたいと思うなら、5枚のリズムを作る必要があります。それも技術です。スレを15枚搔いて、食ったのは5枚というのは、違うと感じますね。本題とズレますが、食った20枚より竿は傷みますし。

結果も大事ですが、プロセスも大事です。負け惜しみでではなく、そこを真剣に考えてみる状況に、現在のヘラブナ釣りは来ているように思います。

価値観は人それぞれですが、自由池で、タナをメーターに取っても、真の意味でメーター規定の練習にはなりません。何かしら得るものはあるとは思いますが、別の練習をした方が、より身になるのにな、と僕は思います。

ここで、昼休みを挟んだ2時間の僕の釣果を記しておきます。ダンゴのカッツケです。

午前26枚/時 ハリ2本

午後30枚/時 ハリ1本

多くの方が、時間5枚も拾えない時間帯の中で、僕の釣果は異次元に映ったのかもしれない。

では、僕は釣り名人でしょうか？

いえ、違います。同行の仲間には、これがどれほどボケたリズムなのかを、解説しながらの釣りでした。カイゼン策はまだ有りました。競技会なら、まだ上を狙いますし、軽々と釣っ



てくるレベルの人達を、僕は沢山知っています。

ともするとゲキシブと括られてしまったかもしれない釣況の中で、方法論を持った人が釣ればこうなる可能性はある、ということなのです。ハッキリ言って、僕くらいの釣果になら、どなたでも到達出来ます。そういう信念から掲げたのが、僕の主宰するクラブであるナリーズの、

「理論なくして釣果なし」

なのです。

ダンゴで時間20枚を越えてくる中で、セット釣りを成立させるのは、生半可な技術と中途半端なセンスでは不可能です。この釣りを始めたばかりの方も、伸び悩んでいる中級者の方も、どうか、ダンゴから逃げないでください。ダンゴがいちばん高等な釣り方だ、などと言うつもりは更々ありません。どんな釣りも奥深く面白い。でも、ダンゴを追求せずに、他の釣りは無理です。そしてそれは、我々が凡人であればこそ、です。クワセを付ければ釣れるのであれば、誰でも釣れます。それこそ一年中セットで良いでしょう。でも、そんなにアまくありません。大会独特のフィッシングプレッシャーも考慮し、結果論から導き出されたトーナメントの通年セットは、あまりにも奥深く、一朝一夕で身に付けられるものではないのです。一種類のエサをコントロール出来ずして、何故二種類のエサをコントロール出来るのか。良く考えてみてください。

ダンゴも分からない。セットにしても好転しない。

「つまらない遊びだな」

と、諦めているほんの少し向こう側に、貴方もまだ知らぬ楽しい世界が待っているのです。

何故こうなったのか？誰が悪いのか？

そんなことを考えるのは不毛です。とりあえず一枚を釣らせる方法論は、間違いなくヘラブナ業界への功績でした。ただ、あまりにも偏り過ぎて、そこから先の世界が失われてしまったのだとするならば、誰かが再構築すれば良いだけのことです。そしてそれは、単なる懐古趣味に終わることなく、再提案、再発明でなければなりません。名人の頭の中、指先で完結する世界ではなく、キチンとした解説とセットとし、それだけにとどまらず、21世紀らしい新しい価値観と共に、展開されるべきだと思います。

スターは必要です。でも、宣伝に終始する、もしくは、終始しないまでも巧みな宣伝へのす



り替えをする釣り名人は、もうコレ以上は要りません。利益を追求する企業の都合は分かりませんが、一般のファンからの、純粋な知の欲求に応える解説者やコーチが必要なのです。ヘラブナ釣りには、そういう人材とジャーナリズムが明らかに不足しています。これでは健全とは言えません。

広告出稿に頼らざるを得ない媒体経営に限界があるのであれば、有志がタダで運営出来る媒体もある時代です。そこには圧力の掛けようがありません。ゴルフのレッスンプロが松山英樹やジャンボである必要はありません。テニススクールのコーチが、錦織 圭やベッカーである必要も無いのです。現役の名人でも過去のスターでもなく、きちんと指導できる人材が必要とされています。インストラクターという言葉/wikiで調べてみれば、それは明らかです。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/インストラクター>

ちなみに、ヘラブナファンにはあまり認知されていませんし、どれほどの権威があるのか、僕には全く分からないのですが、こんなものもあります。

http://www.zenturi-jofi.or.jp/i_towa/konin_ins1.html

釣り人が迂闊に自然保護を叫ぶべきではないとの思いから、あまり関心がありませんでしたが、メーカーのインストラクターよりは自然な存在かもしれませんね。

盲信と洗脳から解放され、この釣りの楽しさを再認識し、伸び伸びと釣りを楽しむ人が増えた時、本当の底辺拡大は起こると僕は思っています。だって遊びだもん。

2014.9.15 江成 公隆